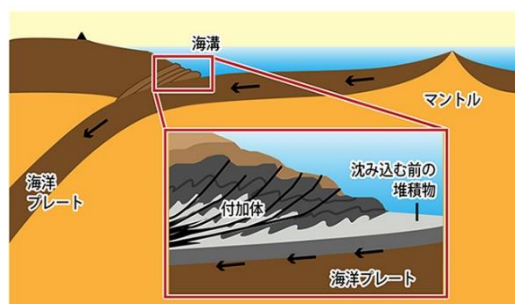


Q61. 付加体ってなんだ

地球は、プレートと呼ばれる厚さ 50～100 キロメートルの何枚かの固い岩盤で表面が覆われています。プレートは、地球内部のマントルの流れ（マントル対流）によってゆっくりと動いています。プレートには、大陸プレートと海洋プレートがあります。この 2 つを比べると海洋プレートの方が比重が大きいため、大陸プレートと海洋プレートがぶつかる場所（海溝）では、海洋プレートの方が大陸プレートの下に潜り込んでいます。

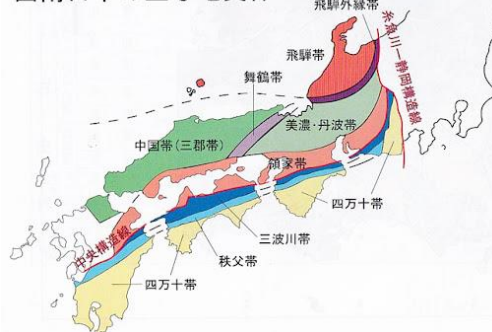
海洋プレートは、海嶺と呼ばれる帯状の海底火山で生まれて、大陸プレートとぶつかるまでの間ゆっくりと移動していきます。このプレートは、途中で生まれた島（海山）や、大陸から風で飛ばされてきた塵や生き物の死骸などが沈んで降り積もったもの（堆積物）に覆われていきます。海溝に近づくと、陸から供給された土砂も堆積します。そして、大陸プレートの下に沈み込むときに、海山や堆積物は大陸プレートの下に潜り込めないので、陸側のプレートの端で表面は削り取られて、断層で切れたりしゅう曲したりもみくちゃにされたりして重なっていきます。これが付加体です。



(1) 話題の研究 謎解き解説<プレスリリース>海洋研究開発機構

日本列島は、昔からユーラシア大陸のふちにあり、海溝の陸側にできた付加体によって陸地を海側に広げてきました。西南日本の地質図を調べると、海溝に近い南東側ほど新しく作られたもので、糸魚川－静岡構造線の西側から九州にかけて、海溝とほぼ平行に帯状に同じ地質が分布していることが分かっています。

西南日本の主な地質帯



(2) 山口大学理学部 地球科学標本室・ Gondwana 資料室

海側から、四万十帯、秩父帯、三波川帯、領家帯となっており、岐阜県に広く分布する美濃・丹波帯は、ジュラ紀付加体と呼ばれていて、古生代末から中生代にかけてのプレートの沈み込みによるものです。愛知県に分布する領家帯の花こう岩類は、中生代白亜紀に活動したマグマが冷えて固まったものです。（今泉日那）